

Title	王朝和歌表現論 : 平安中期から院政期へ
Author(s)	佐藤, 雅代
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/1393
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	佐藤 雅代
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第18304号
学位授与年月日	平成16年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻
学位論文名	王朝和歌表現論—平安中期から院政期へ—
論文審査委員	(主査) 教授 伊井 春樹 (副査) 教授 後藤 昭雄 助教授 荒木 浩

論文内容の要旨

和歌文学研究にとって、平安中期から中世にいたる変革期が、その歌人の動向とともに、和歌表現の方法、歌材の多様化、それにもなう歌学の規範意識の形成など興味深い問題が多いとともに、それだけどこに視点の基軸をおいて論じていけばよいのか、困難がともないもする。申請者は、時代における個人の和歌という観点から取り組み、この時代の和歌史の展開を見据えようとしたのが、『王朝和歌表現論—平安中期から院政期へ—』である。本論文は五章からなり、400字詰原稿用紙に換算すると、およそ1,100枚余となる。第一章「情意表現としての歌ことば」は四節、第二章「歌枕・レトリック・歌材」は三節、第三章「清少納言の和歌表現」は四節、第四章「院政期歌壇における和歌表現」は三節、第五章「藤原基俊の表現意識」は三節からなる。

第一章では、和歌における情意表現の通史的な考察として、「すさび」「さびし」「わびし」「ながめわぶ」を取り上げ、勅撰集の二十一代集、私家集などを対象とし、それぞれの用法、時代の変遷とともに、季節や歌人の特色をも詳細に分類して考察していく。たんなる「ことば」ではなく、「歌ことば」としてどのように用いられ、和歌に定着していったのか、その軌跡をたどり、平安中期から院政期への和歌の展開を探る。第二章では歌枕や歌材の推移について、「井出」が「山吹」や「かはづ」とどのように結びついて和歌世界で用いられていったのか、その変容を見るとともに、伝統的な「ほととぎす」の表現史をたどる。

第三章では、清少納言の私家集を祖上に載せて王朝歌人の代表とし、その和歌の分析をする。その方法としては、彼女の和歌への負い目と詠作意識を、中宮定子とのかかわりで考察し、また和歌的な要素を持つ『枕草子』との比較を通じてその和歌の独自性を明らかにしようとする。第四章は院政期の和歌の世界を知る歌人として基俊を取り上げ、革新的な歌人の俊頼と比較していく。『六百番歌合』での歌題と歌人たちの取り組み、それを基俊と対比し、古典のうちでも『伊勢物語』を撰取して詠まれた和歌の方法、さらには『源氏物語』とのかかわりにも言及する。第五章では『基俊集』における歌枕の利用、歌合の判詞に見られる、俊頼との和歌評価基準の違いなどから、基俊の和歌観や和歌批評の態度を明らかにしていく。

論文審査の結果の要旨

本論文は、平安中期から院政期にいたる史的な展望のもとに、その間の膨大な和歌資料から、個々の具体的な歌ことばや歌人を対象とし、詠作の方法について分析していったのが基本的な方針である。時代的にかなり隔たった期間を対象にしているだけに、とかく概説に陥りやすく、散漫になりかねない問題を、一つ一つ特色のある歌ことばと歌人としての詠歌を、膨大な作品から抽出し、時代的な流れに沿いながら、丹念な和歌の読みと、詳細な分析をした点は、まず労作と評価できよう。「すさび」という歌ことば一つを取り上げても、二十一代集から用例を抜き出し、歌人の詠法や四季における表現法、とりわけ京極派の『玉葉集』『風雅集』の意義などを考察していく。これは、その後の歌ことばでも同じ手法を用い、資料は私家集、私撰集、百首和歌などにも及び、個々のことばの消長と時代的な特色を明らかにしていく。歌枕の「井出」にしても、「かはづ」や「山吹」との結びつきと、多様な意味の拡大、「ほととぎす」の利用の盛衰など、興味深い内容といえる。とりわけ、基俊の和歌観は保守的とされてきた評価を、俊頼との歌合判詞の分析によって、二人の違いを闡明するとともに、彼は中世に継承される「余情」を重んじた歌人と位置づけるなど、新しい見解を披瀝する。

このように史的展開を視野に入れながら、和歌作品を詳細に分析し、それなりの成果を得た点は評価できるものの、「王朝和歌表現論」のタイトルからすると緊密な統一性に欠ける憾みは残る。本論で対象とした歌ことばを考察する必然性、なぜ清少納言や基俊を特色ある歌人として取り上げたのかなど、別にそれらを統合した一章を加えてもよかったように思う。ただ、そのような望みはあるにしても、平安中期から院政期の和歌文学研究に、大きな裨益となることは疑いない。このような次第で、本論文は博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。